俄羅斯紀聞四集 十

ル8
2994
40

俄羅斯情形臆度巻之二目録

俄羅斯隣國を蠶食する計策之事
俄羅斯今帝賢否之事
俄羅斯女主傳統之事
拂郎察帝英雄之事
拂郎察俄羅斯高和戰爭之事
俄羅斯國中教化之事
俄羅斯國中遊女之事

ル 37 3038 40
ル 8 2994 40 特

俄羅斯兵卒戸口多少之事
和蘭之外ゟ貢之物を増すべき事
戦艦を改造する事
西洋諸聖人之事
欧羅巴暦元之事
俄羅斯死刑なき事

俄羅斯隣国を蚕食する計策之事

昔し周の白圭そ徳済子長として人に語り平生
人棄れハ吾取る人取れハ吾与ふ以移子
て貨殖をなしヵ果して天下無比少なき大富
豪とハなれり又信長未々志得ず群
雄並ひ争ひ信玄謙信松永最智勇兼備しく
容易に敵しかたし仍る是ぬし強敵をもとなく
近隣の弱国を漸々に并呑し我か強大なる

に随つて信を穏信を孤立に至らは坂亡スへし
易かるへし且其内ニハ右之良将も病死するあれ
ば其後ハ必ス計策の及ばぬ事あるまじき
也天下を一統する様に致れは一時に雄
覇を為さん俄羅斯ハ膏腴肥饒の人に争ふ
なる地ハ未た同しく知らず専ら止白里亜州
亜墨利加廣莫無人の境を潮キヤスコイ
ペルシヤとは強國にハ妄りに雌雄を決せず加

山托波児小韃靼杯之小國を併せ候處し
ハ矢張白耳信せし意なり夫故地の
七千百七十余之およぶ世界第一の大国ニハ
なれ共其智計之行届ゟ畏るへし恐むへし
然し俄羅斯帝之法を立て替て人ニハ只
莫斯哥未亜之本業伺を探し候處せし
哥撒克禮勿沢亜ありて地にして欧羅巴東北
境より止白里亜カムサスカに至る八万余大

さりとて君のみ独り是を國の富強ならしむる
事ハ據ざる危し且存し土地ニ敵國より侵掠
せし事據ハ却て應援守禦ありて本國の
損失なき能はざるべし　世に武人俗吏俄羅斯
を將能く継業を思ひ之れを輕蔑する識
ある盲人能く畏れざるの類なり然れとも杞憂
に等し俄羅斯封域の世界中半を占むると
思ふ事遠く敵國へ來るに思ふハ甚過憂

なり國の強弱ハ全く人材政治の得失に
依り土地の大小ニよらず且土地大なれバ人
民少なきハ小國ニ異ならざるべし既に歐部
察するに土地の廣さ聊本邦に倍するべし小方
にならざれハ土地を割れハ人物ニ蕃庶なるまし
然るに近來英ニ加へ俄羅斯と抗衡し其
旧都モスクハをよ一旦攻破せしに関はらず況や
我邦彼の本土と隔絶し強弩の末勢なれ

は我に在て良将に命じて邊を守り防禦宜
きを得ば彼を制するを何ぞ難しとせんや然
るに彼が鋒を撓き彼が邪謀を逆へ折くべきは
さるは智士勇夫の窺ひ見する所なり彼
が此地に屬す大なるは我が畏る所なれば我が
畏るゝ所は彼が雄武英傑も君命を我邊
塞に防禦甚宜きを得ざるの二ツに在り嗚
呼し

磐水先生曰大抵論ノ如キカ但織田氏ノ策ト俄
羅斯同情タルカ未タ知ルヘカラス寛永ノ頃英主伯
多珠興リショリ先ツ近國ノ室際亜等ヲ侵掠シ其
領地ヲ奪ヒ今ノ新都ヲ建テ木都児格トモ撲戦セルコ
西史ニ詳ナリ廣漠無人ノ境トイヘ圧止白里易模
沙斯加ニキヲノヘシハ其地ノ連綿シ且併呑ニ容易ナル
ノ長地ナレハナルヘシ何レニモ斯ク廣大ヲ極ルトキハ世ニ雄
威ヲ示スニ足ルヘシ〇世ノ俗吏武人俄羅斯ヲ鑾
夷ト軽蔑スルコハ固ヨリ論ナシ地学ニ暗ク其情

形ヲ知ラサルカ故ナリ嘆スヘシ又傍ラ其巨大世界ニ半スト聞テ過憂ス以下ノ諸説高論ノ如シ但良将ニ命シ邊ヲ守リ防禦宜ヲ得ルト云々二百年前トチカヒ當時太平安佚ノ武家彼ヲ制スルノ智士勇夫ノ有無イカヽアルヘキカ先宜ク満世界ノ大小廣狭我ト其國々遠近ノ差別ト其強弱等ノ事共ヲ弘ク上下ニ示シヲキタキ事ナリ左アラハ其中ニハ志ヲ起シ勇氣ヲ厲シ時ニ臨テ其用ニアツヘキ者モ出ンカ左モナクハ蔑視スルノミノモノト又聞シジスルモノミナルヘシ

俄羅斯今帝賢否之事

古書ニ曰く隣国有聖人敵国之憂也と然

之ハ狭くせられへしヲロシヤ代ニ英主起生る也

隣ニ隣国より蝦夷之境を発羅侵し我大

患となるそニ起るそれハヲロシヤニ英主有るハ我

患も而して国ニ有るを我望む所なり遠キ

世ハ暫くおき当時更り因循やし女帝エカテリ

ナと仁徳有る賢主と聞ゆ其子バウロ、バイトロイナハ

剛強なる中にも智恵ある君にて在位僅に
三年程にて弑せられたりと聞けり 五郎次招状に賊在位辺に忘
のち又王を弑すること有り○採事に王或日遊行の途にして須臾にして毒殺にあひ死しけり 以上二
帝共に窮界過ちし事なれハ深く考究する
にも及ばず何とぞ今帝の人となりを知まほしく思ひ
なり採事に當今の帝ハ温厚和厚なりと云べき
人のよしきこえたり 五郎次招状に今帝アレキサン
ダルハハウロウイチ エムペラトルにて愚なる事ハ吾佳候

母の志をうけて古帝ハ始終かはらず一統安堵
の思ひをなさしめ給ひ 右ニ二書を比べて観れハ
今帝ハ先帝なりの賢主にて母又先帝の強
暴にて人民の失ひを深く憐まるると思
はるるなし 採事ニ英主とハ思へど猶其詳
なることを聞んことをおもふのみ

磐水先生曰當今アレキサンドル賢否云ヒ其詳ナル
ヿ知ルヘカラス兵ヲ煉リ武ヲ講スルノ國ハ益々
勉勵スルヿナランカ必ス良相ト英武ノ良將ハ絶ス
ヿナルヘシ近来拂郎察ノ大戰ニテモ知ルヘシ但國ノ
盛衰ハ氣運ニ係リテ闇君位ニ出ルヿアラハ衰ルノ
時モアルヘシ冨強既ニ二百年此上ハ如何アルヘキ乎當
今及大臣宰相等ノヿコレヲ審ニスルニ由ナキカ
如シ

俄羅斯女主伝統之事

ペテルデテウェエデ 疱瘡ヲ病テ卒ス

従父姉コレヲ嗣ク 曾哥烏尓蘭土ノ公ニ嫁メ寡トナリ彼国ヲ治メアリシヲ迎立

アンナイハシノウナ

父ハイハンアレキシイウイス、ペテルデュロオニノ異母兄ナリ

元文五庚申ノ年主病亡ス其娚コレヲ嗣ク

イハンデデルデ 年十七即位ス

同年病亡ス 子ナシ

イハン五二六七年帝
アンナノ妹「アンリ」十
イハノウカ「カテアンナ」
ナル者入宗瑪匹亜
ノ「メエケレンブ」ノ公
子魯西亜ニ在
テ貴官ヲ授
ル若ニ嫁ヲ以ム
所

右探索補遺
ニ和蘭ノ記録
ヲ引ク

右ノ説ニテハイハ
両人アリ幼主ノ
母イハンハ帝位ニ
昇ラズ

ペテルゴロオテノ女エレヲ嗣ク　魯西亜本紀　據ルニ本紀
ノ廃立ヲ載セズ国悪ヲイムナルベシ且イハンヲアンナノ嬰トイフ
疑フベシ　暫錄シテ以テアンナノ系統履歴ヲ見ルノミ　アンナノ不徳部下ノ騒動イハン
アンナ即位のむしめハ先規を守らす萬擅にし
かりしか暇騰（年乱）に事を好くて総体の法
令崩壊して其卒して幼主イハンテリイ嗣く
此人ハアンナの生出のみ将りて誰も種とふ
知らすアンナ乱政の後嗣子幼弱なれハ國人
服せすして即位の翌年千七百四十一年

寛保元年十二月五日の夜殿下大ニ騒動起
り族ニ大臣議して幼主イハンテリイを廃し
て先帝ペーテルゴロトの女を立つ名はエリサベツト
といふ　三國通覧補遺　東砂葛記同
右騒立し一統を全く是アンナ不徳にして幼
主誰の種なるか知れさるに事起り國人不服
にして以て多く之れを廃せしなりアンナ初
幸ニ通ぜし状正しく幼主の姓氏曹等烏爾

蘭公の遺腹なる事明白なれハ國人皆悦
服して慶事と評議に決するなり此一事大
ニ唐土と相違せり 唐土にてハ男子繼ぐ外貴
の女子を繼し外嫁に出也 女子の庶子ハ皆夫の種
を称し 女子の姓氏を承ることはなさゞるなり 歐
羅巴中の風俗婚姻の禮並女主無き國を治むるお
の事なれば其若子女子を嫁するに似たり
大抵男女平等に相なるべし 聖一ハ帝王

の姉妹又ハ姫君なりとも 一旦國を治し君其
嗣子お承し子ハ矢張帝王の種と称し王
統を讓りては不若其種ならさるハ西洋人
傳統世及綿々とつゞきし事を称せしを唐
土人の論する事なれハ人しれず他姓子移
るとの論あるべし 右アンナの外的記と称する
系統を國政して記せる論なく遺憾
出来無し

ヨハンネス・バシリデス　此王ノ正系後来ノ聖帝
「ペテル・デン・ゴロオテ」ニ傳ルナリ　ヨハンネス・バシリデス」
ノ孫ヲ「ワシリウス・イハノウヰツ」ト云其子「ヨハンネス・バシ
リデス・デ・テルヱエデ」ニ女アリ「マリア」ト云「マリア」一名
「イコナマシア」ト云リ其兄「テオドルス・イハノウヰス」帝ノ
世ニ至テ魯西亜ノ貴族「ヘドル・ニコロウイツ」ニ嫁シテ
「ミカアル・ヘドロウイツ・ロマノウ」帝ヲ生ナリ　コノ帝ハ即チ
彼聖帝「ペテル・デン・ゴロオテ」ノ祖父ナリ　魯西亜世紀

右公主マリアに嫁せし魯西亜の貴族「ヘドル
ニコロウイツ」なる者ハ王と同姓なるや否ハ知らす
されと右も貴族にて血統を承たるにあらね
全く「マリア」にお生しものにて其子孫王位
を継きしなれハ是亦公主の種にて王位を襲
の確證あり

磐水先生曰女主傳統ノ世系諸譯説ノ外見ル所ナシ今帝崩スレハ其后継キ立母后崩メ太子今帝トナル迄或トキケリ太子幼若タル時ハ母后ノ姉妹タリトモ賢ヲ擇シテ嗣立セシムルカユヘ欧羅巴ノ國與ヒキカス魯西亜ニ限リシヿニアラスヤ「ベシケレ」ロンギリエスランド俄羅斯國誌ニハ詳説アランカ

払郎察帝英雄之事 附ハンベンコロウ之事

當今払郎察帝意大里亜伊斯把尼亜等之隣國を破摧し世界第一之俄羅斯と抗衡すると云ふ近代之英主と謂つへし是ハ去ル次ヶ十年の匹夫起り國王を弑るを實ニ信すへき事ニ候へり按るニ寛政九年阿蘭陀風説書ニ云く払郎察臣下之者徒黨仕國王并王子を弑し其年及乱妨阿蘭陀其外近國等ニ因乱を押

篡也及今戦ひ後去ル寅年ナレハ如臣下逆徒ニ
若追討仕王孫ニ旧国主城立テ旧臣ニ若ち護
仕平衡争和ニ及ばハ討近国和睦仕ん在ニ
ト云ニ撰れハ一旦篡奪ニ事具しも云ふよ退
治しゟ却ニ王統ニ返す事是ま和蘭同盟
ニ國のみ篡鐵ニ人ニ奪はれ其逆臣ニ陸遣
いふ事撰テてハ唆ヘ右国ニ仕少り篡奪ニ痕迹
を戮し其痕尾を隠しよすめんためなくハ和

蘭寛政九年ニ風説書ニ払蘭察（郎）今帝ニ篡
逆ニ事及ニ騒動ませや
先手南海を乗回しさんべんニ渉り波羅
泥亜ニ大将ニヲロシヤニ因れし由縁敗ナ時
ニ運ばれハ其所続しして信を成しよ如しし
深く拗るへ至んば何と一人ニヲロシヤニ官船を
奪ひ取り西洋ニ帰りしハ奇男ナるべし
彼ノ払郎察ニ把理斯に脇よ有ゃし幸ゆきハ

相知れハ知れて其後の事ありさまを差に彼
殊更せし事ハ知れざるや抑又捕路寡し事業
を補佐せし始し事も無し我滅ならんなり

磐水先生曰傳聞ト之氏五郎次カイフ所確實ナル
ヘキカ寛政九年ノ風説書實事ニメ亦論ノ知ク
尻尾ヲ隠セル所アルヘシコノ實事ハ訳羅斯ニアラス
シテ知レサルヘシ和蘭ハ必ス隠蔽スヘキカ「モリツハンニシ
コロウ」ハ明和初年ノコナレハ近年及生存セイカヽアル
ヘキカ何レ拂郎察富主ノコハ委リキカヿホンシキヿナ
リ

払郎察俄羅斯両国戦争之事

一去ル卯年以来追々十六通フランス阿蘭陀

一諳厄利亜アンケリヤ及ヒロシヤ両国与敵し及合

戦候処フランス阿蘭陀勝利を得ロシヤ之城府

（モスコウ 四十一日討陣）江押寄セ既ニ同府ニ討取屋舗の外

同所ニハロシヤ帝王武器或ハ兵粮軍用之

不夥敷貯置有之を敵兵ニ奪ハれ候而ハ残

周章候哉且ハ敵兵ニ切入候ニ付ロシヤ

両王之指揮を以て因脩者ニ火毬掛け一回
焼拂ひ士俗弐拾万人余焼亡ニ依而其外
歐羅巴諸州不穏ニ
右ハ本年分共承候ニ付城ニ候亡六年ニ成候
咬𠺕吧表風説承候趣加之候得共和蘭人ゟ書付
差出ス　和蘭風説書
當四月フロシヤ國ヨリフランス國ヘ責寄七月始ニ而
コウレ責取既ニ戦ベセルブルカヘ差急ギ和
議計致シ又フロシヤ勝利ニ依フランス弐拾万人
軍務ヲ追討致候和親弐三千ニ而攻通去ル事ニ而
付テ強進ム因テ「フランス」を去而ニ追法右ニ依テ境ニ
シフロシヤ凱陣ニ依テ故ニ其上多年「フランス」押領シ
阿蘭陀始其外歐羅巴之国々多分當年フロシ
ヤ備之戦又海ニ「エゲレス」其外ニハ和睦致し候趣ニ
候事　英國追報
拂郎察・俄羅斯両国戦争之事　第五號次

如状ニ記シテ有リ然ルニ皆其端ヲ著スノミ
ニテ一斑ヲ窺フニ足ラン誠ニ其詳ナル
實ヲ擢ムヘシ何ソ二西分界ノ土
地決戦ノ模様其梗概ヲ喋々シク
思フナリ元来払郎察俄羅斯ト其中
間ニ亜尓瑪泥亜波羅泥亜ノ二大国ヲ隔テ
敢テ接近セス隣合ニ非ス波羅泥亜ノ東
界ヨリ旧都ムスクワハ尤モ路程隔テ有リ

若シ海路ニ攻メハ払郎察ヨリ直ニ新都ヘテ
ルフルグニ乗込ルモ成ヘキナレトモ今旧都ムスクワハ
ヲ攻落シ後ニ新都ニ至ル事ナレハ全ク陸
ニ攻ルヨリ外ナシ陸ニ攻ルニハ払郎察
本国ヨリムスクワハ遠シ飛鳥ノ如キ物ハトモ容易
ニ至ル事ナレハ中々ニ数千里ノ大軍ヲ
引連レ敵地ニ到リ長駆深入スル事ニ成
ベシヤ且又亜尓瑪泥亜波羅泥亜ノ二

要路を備し敵を遮し又ハ境内におゐて
戦争すれハ何レ甚害にいたりく国名におへ
へきよし諸書中ニ云し戦争之術法のことハり
て入尓馬泥亜波羅泥亜なとをみるへし
ハいつれし盤水子曰昔日子メツ殊く外衰徴
せり衣早滅亡せしやとやされしハさふ
随へきり波羅泥亜ハ百余年以来俄羅斯
ニ侵掠せられ土地大半亡失し衰滅し此

已に亡ひ今迄ハ敗亡せしならん入尓馬
尼亜も払蘭察ニ侵せらるへし払郎
察の帝婦入尓馬尼亜に代るに似たり泥
羅泥亜ハ既ニ俄羅斯ニ蚕食せられ之れハ
俄羅斯ニ服するの力ハ衰弱ニ兼しく払
郎察を呑しと知るへかれ尚偶子蔵亡
せずんハ家早附属のものなりく自立
すへからさるへし当時しは子如何

南西境に接して互に睚眥をなせり今茲
大戦旧都を焼拂れ土俗焼亡して其二
十萬余に及ぶ者ハ戦陣にて命を隕す
其ハ猶更多かるべし俄羅斯両国業
に大敗せり 千六百年四十年して以ヲロシヤに内乱を乗し勿羅尼亜雪際亜二国
もそヲロシヤの地を分ケて取りしか未曾有の大變なりし依れ此后絶して大戦ハ見えさるに然るに
天命未た絶へさるにや再ひ拂郎察二十萬
の寇を打破り其本境まて追かへしけるハ
拂郎察にて大敗せり其本国の境に至るハ
拂郎察敗虜ける入爾馬泥亜にて東方を指
り把理斯して近境にハ何事もなし俄羅斯如
何程勝に乗すとも一国にて ムスクワ を把理斯
近境まて至るハ難かるべし依し風説書遅難
の説 ヲランダ ヲロシヤ 各其本国の事を言ふ
なれハ其飾説に随ふべし一々信用し難
拂郎察先帰して終に敗れしハ疑なかるべし

俄羅斯ハ英と怨あれハ其後南下して年兜爾
人信拂蘭察を擁ても征思あり　試ミ
虚に乗じ氣に依怙贔負をも忘れて是を塞す
子拂蘭察其諸ま意太里亜伊斯把你亜
和して大兵を破摧し　此勢に乗し東向して
俄羅斯と争衡し　俄羅斯も終に功なし
抑其強大推量すへし　當時此拂蘭察俄羅
斯南北に歐羅巴を半分し　漢楚鴻溝を
畫して對峙するの勢なり　仍て近年は内
雌雄争ふへし　拂蘭察しなと倦りて俄羅
斯を困むるハ我深く哀ふ所なり　此天命
如何ともすへきや

磐水先生曰必高諭ノ如クナルヘシ入尓馬泥亜ハ已ニ賊メ鄂羅斯ニ及ヘルハ疑ナカルヘシ帝號モ押テ稱ヲ受タルヘシ松前俘等ノ說ニ王爵（コーニング）國ノ地ヲ并セ属スレハ自ラ帝ト称メ苦シカラヌ常法ナリト語レル田梯郎察既ニ其國々ヲ手ニ属シタル故今ハ帝ト称スルナリトシカレハイヨ〳〵諭ノ如クナルヘシなゞ正當ノ說ヲ聞マホシキコトナリ

伽羅地國中教化之事

キリロ光太夫を請ずるに汝が生国伊勢の太廟
には古社数百ありと云詳なりや誠に然る
よし参人ハ何故崇敬する事の然多や又京
の三十三間堂ニ仏の数三万三千三百あるよし
光太夫是を以て宗旨が事多く
まことしと答しかバ又宗門ハ宗旨いくつ有と
問ければ禅天台一向真言抔なり

しかるに公宗旨ニ付審ニハ記居を差し御
下知有りし信ずる者これなきにあらず多し何の人心
一ならん國を理する所の妨げと論し 光寺史物語
キリロ之一言ニ就く伴羅那ある事を建る
主之意推知すべし伴羅那國中上下一同に
天主を深く尊信帰依し他の仏道を害れ
其る八四民心を一致すべし仕方と思ふ
天教八我邦ニ大禁なれハ其數多事を

事吾知る所ニ非ず雖とも處分し
群書ニ少く窺へ數見せしとなく其大意
を觀るに天地日月人物禽獸草木皆
天主これを作り初む文此世ニ善行ある
八死後ニ天主天堂ニ登らせ歓楽を享
しむ悪行ある者ハ是ニ反す 祆教佛氏ニ異る所ハ地
獄極楽と言ふ それをいはず 輪廻 又天主再生し娵なり天
主之神霊ニ犯し女子に後ニ宿り夫なくし

て陣形あると称して延兵布陣の説のことき兵
義理に通したる人若ハ玲瓏するとハ是
かめ数あり密か俄羅斯事をあらはす
智ある士は其虚実を知らさるにハあらじ此
術の肝要なるハ民心を一にし法令易く
むる事にありて而して是兵法の味
せさるにあらすや譬へハ今戦場にのぞみ
號令を用ゐて将士一同に之を成しむるハ

経て號令少しく無理ありとも功を成すと
いへりさりしも能く行届かる善き號令にも
色に迎へて雑にし暫時に肉に浅く返くに變
改あるとあれハ士卒疑惑して戦いあらず
に敗徴を現はすあり俄羅斯君臣深
く此意を悟解せしものなり且愚民を導
くるも奥妙の理を淺近に教ふるあり易
きとなり天然と浅近なるハ小民の感

服する所以なり　我邦諸教混殽して
一定の道なきハ教良なへし　我儒の教遠
近浅深高卑精粗別なきなりしといへとも
何故なる儒の学者兎角好く性理大極
なとの事を詳論し卑近の事を忽略せ
故に民を化するの効甚た遅し　若くハ
遂に孔夫子立教の本意に叶ハし　何れ
儒教の内にあるも民を化導するハ
良法を講究し（立之め）たきことなり　予別に具論
あり此に贅せず

磐水先生曰確論公翁毎ニ思フ所ト脗合ス我邦諸教混淆移リ易キハ古来確乎タル正教ナキ故ナリ悲ムヘシ支那ニハ先王ノ道トイフモノアルユヘ仏道入リテモ天教入リテモ本邦ノ如クニ眩惑スルモノ少ナリ儒モ亦性理大極ノ高妙ヲ説キテモ我儒生ト称スル輩ニハ勝リテ其教行キトヽカナリユヘモト我ハ彼ニ擬メ我ヲ化導セントスルユヘ人情ノ差ル所アルヘシ道教ハ其土俗ニ相應スルヿニアラサレハ行キチカヘアルヘシ異邦ノ教ヲソノマヽニ施シテハ行レカタカル

ヘシ但佛教ノ如キハ我俗ニナシヽミヨキコトヽハ見ヘタリ
コレニテ上俗ノ賢愚利鈍ノ別相ヘカルヽヨラウナリ平
均メイハヽ支那人ヨリハ愚ニ且鈍ナルヘシ凡メ愚
者多キ世界ト見ハ卑近ノ教ヲ立ツヘシ上智ト下
愚トハ移ラスト見テハ必一致ノ化導届ザルベシ釋氏モ
天數モコヽヲ見開キシト思ハルヽコトナリ予別ニ具
論アリ此ニ賛セス

俄羅斯國中遊女之事

一イルカトツカ子遊女有り數尾の様子存して置
たる如くに抹爪を屋へ遊女共手を腰に掛ケ居
向ひ居て戯れ言なく皆ならひしき
頭に結ひ入を重ね用ゐて都て美しさ絶たるし
ゑそ　魯西亜風土記

一亦悪物ありて江戸の地獄と云ふ者としき
子共を事寄する時は重き罪有り　右上

ドーシウ門前倡館あり大臣親故退縁ありしこ
る又妻子を携へ遊館そ　光孝又物語
遊女屋へ行まし光亦貧しく其て妻女ある若
ハ遊女へ行事停止のよし　環海異聞
風土記に二事を書しく善き如れハ俄羅斯
花柳に風俗ハ我邦と異なる事なし怪
むへきハ物語異聞二書に異同ある事物
語まてハ大臣妹妻子を携へて遊女に行

異聞まてハ妻女ある者遊女停止とよし然
識に東西表裏ありて遠行き何とか信とせん
や物語に見ゆる所親故に隠し妻子同道に
て遊びたるハ却て其の蔵着なるべし
酒乃酔に我乃いふまゝ手を携帯を鷹
むるにハ行かざる事なし風土記に妓とハ制
物あらん又異聞漂客乃言を伝聞し録して
親見したる事なれハ信じ難き所ある也」

先年渡唐し琉人楊文鳳ニ予昔同撃せし由
云唐土堅く禁制ニて妓館絶て無し延遊人江
面語せり唐俗ニ浮屠淫蕩あることハ清人ノ斯
上疏せしハ咸豊ニ節よりハ中々なる実ニ盛徳
之至る所本邦抔ハ聖人あつて継へきに二年
二年まて天下中ニ妓女全く止むる事ハ難かるへし
就し諸藩ニ勤番者若輩ニ所謂吟味夫様
ニ至り深山住れハまる大小雲形物珠

右場ニ移り

磐水先生曰異聞ニハ漂民ノ話ヲ聞書セシニテナリ他ノ二説余未タ聞ス怪ムヘシ然レ𪜈コレハ正説ヲ得ルヿアルヘキカ○琉人目撃トイフノ話コレ亦信シカタシコレハ清商ニ詰問セハ必ス分明ヲ得ヘシ

俄羅斯兵卒戸口多少之事

俄羅斯国中戸口ハ多少兵卒ハ衆寡我防禦ノ為ニ知ラズシテ叶ハザル事ナレハ知リタキ事ナレドモ秘シテ未タ其的当ナル確説ヲ聞ス俄羅斯帝随身ノ兵三十萬（作五）ト云ヘハ魯西亜志ニ見ヘ随身ノ兵ト云ヘルハ常備ノ兵ニテ兵萬人ナルヘシ近ヨリ払郎察ト大戦ノ払郎察二十萬ノ大軍ヲ大抵討取リシ由ナレハ對待スヘキ訳

恰も西藩あり唐土ニ兵ニ士民を驅逐し
て戰ひし時ハ容易ニ大軍を發せしが惟世兵
農判然と分れざる上ハ二十萬以上ハ出軍
財稀なるのミ見ゆるなり然るハ俄羅斯兵
力ニ強弱なく論せバ兵卒ノ多少ハ漢唐宋
明の同様なるべし右兵卒ニ至キ割三百戸
數あるニ稀少なりと思はる普西亜國志ニ帝都
都モスクワ十五万家ありと新都ハ盛なる繁華

ニ出あれバ其中是ニ準すべし 此魏ニ一方
割據ニあれども高歡都を遷せし時洛陽
人家四十萬ありとぞ如此割據し數ニ之あり
それハ我江府唐土ニ南京へも及ばぬ中
なりイルコウツカハ此白里亜第一ニ都會なる
漂客同聲ニ説ニて家數三千軒程ニ由瑠海
黒閣ニ見ゆ 魯西亜國志ニ人家千餘とあり 記閣ニ市中家凡七千軒余とあり 魯西亜止
白里亜ニ大都會なれバ其他曉漢無人し

境を了知せし元来俄羅斯の地如此にして
多きに戸数如何でぞ少からさるを知らんや予往々
之を考るに支那の戸数西漢宋朝の盛時ニ及
ぬ地に富る處なし（戸数前漢ハ千二百二十万余 後漢ハ千六百万余 宋主客戸二千萬 文献通考ニ馬端臨其過多なるを疑り 明ハ千六百万余なり）乾隆年中清の戸
数 欽定大清会典ニ三千八百万ニ近く夥数
蓋清人土地ニ広大なるハ宋明ニ三四倍し
太平ニ百余年續きしあれハ斯く迄に多き
然るに其ハ俄羅斯の戸数清数三分の一ニ足
當る地なるにて也

磐水先生曰兵卒戸口多少ノ丁高説ノ如クナルヘシ
但強弱ハ兵卒ノ多少ニモ拘ルヘカラス軍民衆キト
知リテ備防スルニハ如ス

和蘭之外入貢之國を増べき事

當時西洋入貢之國ハ只和蘭耳なり海外諸蕃之動静和蘭のみをもつて聴く故此ハ片ぱかりにて虚誕なりとも詳すべきあるまじく欧羅巴之風俗ニ虚言を常とする者なれバそれ故己が利害得失ニ係はる事ハ随分虚説をかまへ申べし何卒和蘭之外二三ヶ国も入貢を免さるべき事　排尓察　弗耶瑪尓加莫

欧尓巴可なんと如きハ和蘭之外二三ヶ國
ト入貢する事あらざれバ外国之情態を盡さ
明白に分り虚偽を弁別して参互攷訂
して是非定むるに可能なるべし古人之言
に偏聴生姦独任成乱といへり和蘭のミ
を偏信しては謬説を信して事を誤る
事あるべし且又和蘭ハ小国にて自立の大
国に併さるれハ隣国に依恭するに拘る

一策なとし随ひて依恭するとの事あるべく
和蘭の入貢も絶なバ誠に闇夜に燈を失ふが如く
外国之情態も知れず鄂羅斯諳厄利亜
ごときの黠虜共今に謀まんとするも頻に覬望
を防禦する事ならざるべし國初にハ入貢し
國に依りし中華異国商舶も入来り
列祖之深き思召有るべし其後寛永年中
か洋禁厳重なりてハ全く邪教之民を

惑せしを免れしむるなれハ是亦國家の
要務と謂つへし然るニ今ハ邪教消滅して
跡形もなく黠虜邊を窺ふを國家の患
となれる西洋の動靜を預め知置く備
御學も亦當時の第一の要務なれハ諸
人員の說同する　神祖の學慮に叶ひ
獻廟の趣意ニも遠からさるへし　此すし
說徒ニ人の聽を駭ス斗ニ信仰するものよ

なく識ニ縁の下の力持と人も敬るへきなれ
と社稷の大計を預め講究して異日の韻
間に備ふるハ卑賤の臣當然の道にして國か
安き人に宣言するにハ訝られ

磐水先生曰至極ノ高論ナリ但シ今時ハコレヲトヽ
ノフヘキヨウナシ拂郎察弟那瑪尓モ入ルヽヿナルマジク
又印度ノ莫臥児ハ國ヨリナリ已ムヿヲ得スンハ廣
東船ヲ入レタキヿナリ廣東ヘハ歐羅巴五六箇國ノ
商船入津ノ由ナレハ大抵西洋ノ動靜ハ聞得ラル
ベク亦彼船ニ諭スルノ致シカタモアルヘシ今新ニ他ノ
歐羅巴ノ船ヲ入ルヽヿハ種々ノサシツカヘアルヘキヽ
尤コノセツハ絶テ出来ヌワケアルヘシ残念トイフ斗
モナキナリ

戰艦を改造すへき事

自赤狄為梗朝廷命嚴沿海之備烽堠相望炮坐閒列干戈器械之屬莫不備設獨至于修船之說人未嘗出之于口夫烽火之警干戈之具或有欠闕未必立致大敵至於船艦則為今日防虜至要至急之務不改造則不可以邀敵而附之不問何也夫鄂羅斯以舟楫為國以交通萬國為務船艦之大凌雲日

堅踰金鐵隱如一小城而其操之也進退周旋
惟意所嚮易於使車無論本邦之人不諳水
戰即以本邦至大之舟與儞船相接仰望不
及者一丈餘智者無所施其巧勇者無所措
其力無事則已有事則相率而淪于波底耳
豈不哀哉治平日久人情怠弛憂嘗貴而重
改作聞有唱修船之說者莫不群而譏笑之
以為決不可行不思之甚也慶元之際洋禁

未嚴商人遠々往暹羅天竺等國互市今則
舊巍峩之大船渉赤馬關播洋一衣帶之海
尚且時患覆没焉能凌南海之浩淼乎可見
當時舟船比之今日其措造之牢操弄之妙
迥乎不侔也吾以為和蘭舟楫之巧不遜赤
狄今加必丹而下留滞瓊浦不若厳娵利諳
而問之可以一一得其製造之法因而大修
戰艦習水戰于海上數十年可以諳練精熟

如蘭人矣則以邦人之慓勇兼西洋之長技戰艦有弗勝矣乎時無事用之于漕運有事則用之於戰鬬亦未始爲無用也炸熕炮座沿海守備其費爲如何而獨憚於修船邪今置其費而不爲及蠻人大擧入寇羣數萬生靈淪之海底以致害延社稷禍蔓天下謂之計之得者可乎噫 修船說

煜按五代時周與唐戰唐水軍鋭敵周人無以敵之世宗每以爲恨返自壽春於大梁城西汴水側造戰艦數百艘命唐降卒教北人水戰數月之後縱橫出沒殆勝唐兵俄羅斯其初不甚長水戰後命於北高海邊大造戰艦日講水戰卒之能南鄉困都児格西韃等强國莫敢攖其鋒人病無志耳有志而事不濟若未之有也 修船說跋

右南(後周)塘俄羅斯之二事出[illegible]

志ざす方ハ舟船を改造し水戦を練熟するも難きにあらざるべし

孔子曰工欲善其事必先利其器今也欲講習水戦船艦不可不先更造也寛永中耶蘇賊起於天艸已乎　猷廟因命遂學祅教者且下令改船制使其不勝凌絶海蓋慮其或伺間而往西洋習邪教也今之舟船皆其遺制今卒然創更造之説人将謂臣主張曠見不顧先公之命昧不知政貴随時制宜

猷廟狹陋船制所以絶邪教之萌用慮至深遠也今祅教剪薙無遺而猶規々執守成法不亦拘手且　猷廟而有知臣不知其喜悪守成法以取笑於外夷乎将喜修舟艦習水戦以威制海内乎況臣非敢盡更造天下之船其於今所習用者国遑而帯改特願別製大艦以供決戦之用耳　嶽極論時事封事

亦害之論ずる如く今日ニ在てハ船艦を以て送
する事第一之急務なり島ハ飛ぶが若
之へ塁なり歟ハ走る者也之論なり我
邦ハ海国なれハ是非水戦を習ハずんハあるべし
海国なれハ水戦ニ習ハざるハ島ニ翼なく獣ニ
蹄なきニ同し但異邦ハ絶ず外寇し来る
者ハ其儘ニ捨置し今日ニあるべく
狡黠ニて夷虜類ニ我党の隙を伺ふ豈悟らん

ずして備へさるべからんや水戦を得さるハ火戦
艦を以て製すべし南敵ニ対し勝敗を争
ふハ筆者南方器械平等なるべし
今我大船を以て彼ニ比れハ進退も長伏
ニ敵するへからず若戦ハバ常に勝敗已ニ知れ
なり我秋津洲名将之多く敵ニ信
頼盛ニ備将ニ当るも勝ハ知し難き
べし先年長崎ニて黒船焼沈めし時ありし

崎湊に列入且敵の不意に乗しなれハ誠ニ嚢
中の物を探るかとし然れとも我兵死傷し
数殆彼より多し若し此節海洋にて
吾軍雄を争ハんに忽に数萬の兵卒を
魚腹に葬るのミ歎かしき事ならすや今
外夷に侵掠に遇て俄に舟船改造し彼を
防かんハ盗を見て索綯に用ひ整へるとも
防かん然共盗を見て索綯ても間に合ざるにハ

勝るべし此故に盗を縛る縄ハ兼て綯置
盗を縛る為し俄羅斯是迄思ひよ
寄せし後日寇を此方へ寄せてハ法令ひろく下
七年に病に三年の艾を求るを道にたとへし
しかハ此前ゟけり但し舟船を改製するハ
費用莫大にして当時度支窘迫し時節
にてハ物ニ容易ニ事ニ行れ候し節倹を
専らとし国儲餘りある上に事なり 空言

無施ハ中国ケ是ニ甘キ

磐水先生曰戰艦改造水戰ヲ習シムヘキノ一大緊要明議論間然スヘカラス但今本邦無事ノ日ニ在テハ其言聞レ其說行ルヘシ氏思ワンス窘迫ノ時節其費ヲ厭フノミナラス昔時トカワリ今時ハ虜蠻覬覦ノ隙ヲ伺フ云ヘノヿハ下民ニ至テハ詳ニ弁セサルナリ若今新ニ軍船ヲ造リ水戰ヲ習ワシメハ愚民等大ニ異ミ不日ニ干戈ノヿ起ルヘシト天下ノ民心ヲ動スヘシトノ恐レモアルニヤ事ヲ解セサル方俗ノミナレハ左ナキ氏イニカゲシ既ニエトロフノ乱妨アリシ後軍船作

ナルヘシ水軍モ習スヘキトノ沙汰ナキニシモアラス頗ヽキヽ
タルヿ𪜈モアリ彼是スル内ニ事穏トナリタレハ絶テ
其沙汰キヘ失セタリ盗ヲ見テナハナウシメタキヿナリ
乍去是非モナキヿナリ皆此太平ノ弊ナリ此期ヲ
過シ今時ニソノ企アラハ必ス民情ヲ動スヘシ圖ヲ
ハヅセシト云フヘシ嘆スヘキカナ五代ノ時周世宗
唐ニ懲リテ戰艦ヲ作リ水戰ヲ習ハシメ唐兵ニ
勝レルヨウニナリシトイフモ士民上下コレニ對メ恨ル
所アリシ故ナレハナルヘシ方今我國寧靜ノ時ニ當テ
ハ行ヒカタキヿモアランカ敢好メルヿニハアラサレ𪜈変
革ノ代ナラテハ攻メカタキヿニモヤタヾ大息ヲナ
スマデナリ頻ニ外寇ノヿニテモ起リナハ定テ萬
事ヲ廢メ其事ニウチカヽルヘキカ左モナリテハサシ
アタリ昇平ノ治務事シゲキヲ以テ先ツ廢
弛スルヿト思ワルヽナリ候深ク國家ヲ憂ル人アラ
ハ又イカヨウニモショウモヨウモアルヘキカコハ草莽
ノ賤民等論スル所ニアラス

西洋諸聖人の事

予嘗て脛蹩論十帋を著し専ら唐人の僻見を聞く其中の一條聖人の事を論せり大意

知とへらく唐人の論聖人等は支那にのみ産

絶く外国に出さる様に申ハ井蛙の見と謂つ

廣し處世界の内に支那程なるハ聊程にして

黒子の面に着くかことし支那に聖人ありて他国に

却てなかる理なし唐人己か国を自満するハ怪

むかしより我邦の儒者ども此説言を信用す
るは矮人の観場なり我邦の神武崇神天皇
帝のごとき無為にて治る事の功大聖人と謂つべし
但其所謂唐土の聖人と云は文辞秀麗光彩燦
爛にして其上後人色々に矯飾潤色し鬼神の
ごとく申成たり然るに見れば紛雑錯乱なれども
實におもふ事異なるなし實異なるなくば聖
人と聖人なる和国より何ぞ外に錦を

待んや我一国のことなれば他国は推て知る
べし儒者は唐土の書斗を渉猟し管窺蠡
測の見多きも此論に心づく識者なかりし嗚呼
学者は今日の事を正と記すれば吾論は無
用なり近比一二蛮秘の書を翻譯して世に
行るゝ西洋の聖人の道を説くを採て
西洋の群書を編閲せば其言に事蹟載斗異なる
なし猶よく阿るべし熟して論ずるに西洋の聖

人大抵三様あり帝王之位に居て仁化國中
に遍く威沢臨迹に被り禮樂制度を定め徳
業を成す聖人と称するあり下位に居て徳を著し之を
學業道徳に行ひ修練し道統を継ぎつぎ教
誨を施して士民を化導し學術をひらく聖
人と称するあり又一種の學派を創唱し釋迦
老子のごとくにして聖人と称するあり今一二
之証を左方に列し以て考據に備ふ

厄勒祭亜ノゴロオテアレキサンデル
意大里亜ノジュリウスカイサル
俄羅斯ノペテルデンゴロオテ
以上三帝ハ事業盛大なること最西洋人
之賛美する所なり
入尓馬泥亜太古ノ世之聖人諾厄ノ曽孫ア
ケナス始テ此土ヲ開リ 増譯采覧異言
加列児・臥羅帝 羅馬ノ帝ニシテ西土中古ノ大聖人ナリ 仝上

聖意撒伯児聖母之親戚有聖德　罷西畧聖人曰施恩之事異哉　聖亞吾斯

云莫富於神貧　厄肋卧畧聖人云饕餮之徒而衆德痒　若望聖人曰幹尓目之人尓不

慈愛之　依書名　西聖語曾曰學不貴窺簡策　論學記　聖亜聖斯丁曰天主容不

善之人　仝上　西土一聖德士若都尼伯樂者嘗云吾豈不知為善也亦為惡也隊哉　仝上

此樹ノ下ニ所莫ノ「ベンヤアン」ノ数徒ノ如キハ清浄苦修ノ者ニ彼教中以テ聖トスル者

ナリ

「アリ」ハ古人ノ名ニシテ百児西亜ノ人以テ聖ト称スル者ナリ

右二條東西紀遊

俄羅斯王アレキサンデル、子エフスケイ國人コレヲ
尊ムテ聖トシテコレヲ崇ル世紀
如徳亜國初有大聖人曰亜把剌杭 後當
中國虞舜時 其國王多有聖德 至秦
秋時有二聖王父曰大小得子曰撒剌満
佚書名
拂郎察中古有一聖王名類斯若 仝上
以上諸王德業をもて聖と称す 唐土聖人の

唐太宗清康熙なるべし
犧農堯舜禹湯文武の如き者なり 然れとも
伯多珠ハ太子或ハ弟子臣下を打ませし
聖とは臣下をうち…にせしハ丈夫の仕業 英氣に餘りて聖
ならずと言ふべし
聖人ハ皆人道を立て給ひ我邦
唐土の聖人と称す 徳有をも聖と称す
昔者又有西土聖人名謂嶼摸斯悰諾欽
一槩通天主之教而書之於冊 佚書名下同
往時敵邑出一右聖神令人稱為佛郎察斯

毅立一會其規戒精嚴以廣為尚今從首
有教萬友皆成德之士也
西土上古多有聖人千幾千載前預先詳
誌于經典載厥天主降生之義而指其定
候傳道之候(即)已畢自言期候何日歸天
時有四聖録其在世行實及其教語而貽
之於列國
以西巴亜尼
一以奉稚歌黙聖人為十二

宗徒之一首傳聖教於此國
拂郎察　初傳教於此國者原係如德亜
國聖人録雜録
意大里亜　耶穌作天之後聖徒分走四
方布教中有二位一宝(伯)祿(多)祿一宝祿皆至
羅瑪都城講論天主事理多人信從從此二
聖之後又累有盛德之士　聖人若(多)瑪斯
着陡録日亜

阨入多、當時天主教中有前知聖人名倫
瑟
以上諸人聖教を紹述屢竒あしたる聖
人を猶孔子に顔曾思孟周程張朱あるか如し
默加國ノ都モ亦默加ト云フ「コ」古ヘノ時聖人
馬哈默出生セシ地ナリ 増譯采覧異言
聖多默ハ亦其の聖人「アポステル」、トホミス」
初ゟ若狂めしれの教あり 印度志

以上二子一派の教を立つるを以て聖人を
称せる唐土の老子なるかごとし
西洋の聖人三等上なるを述とし詳に是を論
するに功業ぐるに大なるハ其子をとをみし臣
下をとを打まちてハ聖人と称し聖道を紹述
屢竒セし人ハ亞聖唐土ニ云賢人君子なり
信し人ハ亞聖人を称しおよそ一派し道を胎
めし人ハ天下通行ろ正道を顛覆して

聖人と称せらるゝもの多く有り然るときハ聖人の数
唐土より更に多き理なり是を西洋人猥に
聖號を翫へしなるへし畢竟は聖人の號賤なり
容易に附く人ありしにや是も無用し
議論なれとも西洋の情形を考ふるの一端なり
り西洋古来の聖人一二を按挙するハ雖有
ものなれとも右の外目当に有る名高き聖人有らハ
無用しかるべし且徳義をもつて聖人たる三

等に何たるく評せしなり如桀紂楊ゟ大謬
にあらさるへきや

磐水先生曰殷鑒論中聖人ノ説古今未曾有ノ高論トイフヘシ翁博ク支那ノ経史ニ渉ラス甚浅陋ナリトイヘトモ嘗テ思フ所高論ノ如クナリ已カ居ル所ヲ聖人ノ中華ト教称シ四面ヲ四夷八蠻ト賤スルハ井蛙ノ見ナリコレ昔ヨリ僅ニ其近傍諸國ノ夷風ナル者ヲ見テ遠ク印度百爾西亜亜刺皮亜阨入多如徳亜ヲ始トシ欧羅巴大洲ノコヲ知ラサルカ故ナリ彼ハ既ニ世界四道アルコヲ知リテ支那ニハ孔夫子ノ教アルトイフコヲ謂ナリ

一ヲ「キリシチヤンシ」一ヲ「ヘーデ乃チ支那ノ聖教モ其一
チシ」一ヲ「ミホメターチン」ト称ス、
トスル之支那称スル所ノ聖人ノ言行ハ論スルニ及ス、
西洋諸譯說ニ聖トイフモノハ其人聰明睿知ニメ
能ク人倫ノ道ヲ明シ天下ノ人民ヲ化服シ仁
慈ノ心深ク士庶其德ニ悅服スルモノヲ指メ聖トハ
譯セルナリ和蘭ニテ フルスタンジゲル 又ヘーリリグヘールト
イヘル語ヲ斷ク譯セルナルヘシ フルスタンジゲルハ才智明
敏全備ノ人トイフコトナリヘーリグヘールノヘーリグハ純
粹精明ノ意ヘールハ君ナリ尊称ノ義ナリ聖人

ヲ三等ニ分ツヤ否ハ知ラストイヘトモ堯舜文武周公
孔子ノ如キ人ハ固ヨリ漢高祖光武唐太宗今ノ清
康熙帝ノ如キ人モ斷リ称スルト思ハル支那ノ堯ヨリ
孔子ノ餘ハ聖ト称セサルノ類ニアラスト知ラルシカレハ
何等ニモ分ルヘキカ何レニモ仁心アリテ諸民ヲ化シ治
國平天下ノ道ヲ行フ人ナレハ斷ク称メシカルヘク彼
諸州其人ニ乏カラス漫然トメ處置トハ賤視スヘカラス
ルカ但禮樂文物制度ハ其國ノ宜ニ從テ立ル所ナレ
ハ彼是自殊異ナルハ當然ノ理ナリ凡ソ天下ノ道教

ハ其立テ方ノ相違アルカ如クナレ圧實ハ去悪進善ヨ
リ外ナキコト見ユ其中他ノ三教ハ萬民多ク愚昧
ナリト見解シ多ク卑近ノコヲシテ化導スル趣ナリ
コレ夫耶蘇教ノ立テ方ト六差ヘアルカナリ訳字ノ聖ノ
字ヲ以テ見ル時ハ漢土古来天下通行ノ聖人ニハ
差ヘルトノ異論モ起ルヘシ右ニイフ如ッナレハ近世トテモ
「フルスタンシゲル」ハアルナルヘシ前論實ニ感嘆ニ堪ズ
古来儒家者流ノ未タ言及サル所ナ

欧羅巴暦元ノ事

暦元ノ事近来欧羅巴一統千七百余年トス千
八百数年ニ及ヒ有リ若中興革命意太里亜
ノ儒者馬斯加侵沙見隆生レ次年ヨリ天主
生レシ事山村昌永ノ譯書所載向ミナ[illegible]ハ識テ
数ヘテ其錯ヲ正ニ何ノ故ニ就テ成同ク暦
元ハ天主再生ノ年ヲ天主逝去ノ年ヨリ此統
恒ニ彼ノ教ヲ移シ天主亜漢ニ来ニ再臨

誕セし年数ハ今数ふれハ大概千余年也 又
此説何そ怪むに足らさる事なりや
職方外紀ニ天主降生無数歴今千六百餘年
とあり 其書成ル大抵二百年前の人なれハ今
ハ凡千八百餘年ト謂て成るへし

磐水先生曰暦元天主降誕ノ年ヨリ筭計スルモノ疑ナシコレ歐羅巴總州同様ナリジュリュウス帝カナルト云モ實ハ契利斯督ナリ但此名ヲ避テ中興革命ナドヽハ譯スルコトナリ彼洲天主降誕ヲ以テ暦元トナスノ真意ハ未タ知ラサルナリ契利斯督ノ教ハ正法ナルヤ否ハ知ラス我方ニ妨害ヲナセシモノハコレヲ名トセシ故ニ邪法トイフコト上下知リ傳ヘタル上ノコトナレハ譯忌スルコトナルヘシ

殺中ニ屡詐全
船ヘタル黑ニ因
武ドブ三再
史「デミテイ」
。コルニクプロ云
スドイー山ナル者
七百十七年
三
伐ノ始ナ三遠
リ伯多祭勁
孤ニ於テ漂流
リヒ二箇月ノ
レヲ陳辰シ
西方ノ成ト十七
魯西亜國…

俄羅斯刑罰の事

一 イルコワコイ略してイルコといへる所の通人ヒヨー
トロ・ナレボイイ迄聊かる私欲の死ニ依く章
猶子呈書ヒ首を刎られし於イルクワコイ」
テルセヒスコイーの二三ハ東方の大都ニ在
通漢未らめ況や下民ニ於く之推量
きしとぞ　赤人問答
宋藝祖遺訓して決して士大夫を殺すかれ

なりしも宋一代随分其法を守り道ありけり
尤姦臣君命を私して冤殺せしハ有りとも
あり俄羅斯實に死刑多く大清ハ
國王如何程暴虐なるも大臣の法を永罷を
如く容易に首を刎る事ハ許されなりしそ
也卒に人を殺すまじと思ふまで法度大成
るハ随分死刑を用ゐると雖國法立てハ聖
や此一條先哲も議を見ひくなれど猶疑惑

消せし後再兵を起すのみ
彼の史を見れハ人を殺し恰も闘戦の外
無く又殺されし事ハ多くありしか
為そ中興の英主と称へ奇子孫繁し今
の河中の宅の上層の基ありて尺地河水を殺
し是より如く四海萬國の外周游し得
其の船の無絶倫なるこそ神明の子孫
すべき皆今までの主人の口碑に傳ふべし光

吏ニ与ヘ是ニハキリロニ糾さハ盗役を作り
て善を成さし 老大夫物語
昔ハ死刑行ひたまひしかれと近来ハ政より犯
者ペテルアンキシ井ウイス白刎刑の刑行ひ其人の為
もして他人を好道へれて其死ぬ子ふんく
者有るものなし 普西亜風土記
漂家ニ説 俄羅斯ハ暴安過ぎて似たり 霄
人ニ誇言を過信しても故ニ伯多禄分死刑

を止めしむ事ニ於て推量ニ説きしても據るに
ことなるに似たり 環海異聞ニ載する和主殺
親殺ニそよ斬罪ニ行ハさるハ疑ハしき事也
然聖人ハ大悪人をも大刑ニ行ハれ 殺一戒百
殺ハ止殺ノ道理ニ而俄羅斯人深ク
道を知らバ深くして聖人ノ法ニ従ふべし 主殺
親殺を斬罪ニ行ハずして而治るニハ何ぞ
やまし 魯西亜記聞ニ酷刑疑ふ事の甚變

それ共寒くしロ合わすべし それハ尤ハ條り
とゝまよ防べし 西域聞見録ニ 鄂羅斯刑
罰極嚴男犯盗女犯姦殺人不問謀故闘
模以及出逃私入別國若概以斧剁殺之
右ハありて標るゝ是にてそれ等事参考な
備ふべし

盤水先生曰死刑ナキノ說漂否ノ詰ヲキヽシモデ
ナリ詳ナルコハ知ラス笞刑ハ例ラルヨリ其身ニトリ
ハ苦シキヨウスナリ死刑ヲ行ハストイフコトモ近来ノコ
ナルカ其差別モ知ラス魯西亜國誌ヲ讀了セハ分
明ヲ得ヘシ傳說據リ證スルニ足ス
右十二箇條一々致考候処此上ニ申
事ハ勿論之候任命右之評判致し候
併筆之任せ不残御校正申上度頼而彼
以呈許遠江藩書出来候 桂見吉安

誠ニ一感服ニ候得ハ得と写置申度存
合し料ニ一実を精識ニ基ニ候ハ白已ニ
候也　以上